裾野麗峰山の会山行報告書

文・写真　諏訪部豊

山行番　　個人山行
日　時　　２０１３．４．２８（日）快晴～２９（月）晴
山　域　　中央アルプス・三沢岳、木曽駒ヶ岳山スキー（千畳敷カール、最高点＝2956m）
コース　　２８日＝千畳敷カール 9:20～極楽平 10:25～三沢岳 12:50･13:30～極楽平 15:40～千畳敷カール 16:00
２９日＝千畳敷カール 8:10～乗越浄土 9:40･10:00～木曽駒ヶ岳 10:45･11:00～乗越浄土 11:25･12:00～2911m ピーク 12:20･12:50～千畳敷カール 13:00

標高差　　上り・下り　千畳敷カール２６１２ｍ～木曽駒ヶ岳２９５６ｍ＝３４４ｍ
参加者　　単独

２８日 5:00 に伊豆の国市の自宅を車で出発し、朝霧高原から中央道を駒ヶ根ＩＣまで走る。菅の台バスセンターに 8:00 到着。8:15 のバスに乗る。ロープウェイを乗り継ぎ 9:10 に千畳敷カール到着。

計画書を提出し、外に出る。素晴らしい好天、そして豊富な雪だ。昨日新雪が降ったとのこと。右手の八丁坂は既に数珠繋ぎ状態だ。私は左手の極楽平に向かう。シールで登ろうかとも思ったが上部の傾斜を考えると初めからアイゼンで登った方が早そうだ。板をザックに付けて登り始める。

１時間で極楽平に到着。目指す三沢岳が目の前だ。ここから伊那川源流へ滑るためのドロップポイントは宝剣岳側に 100m ほど登った所だ。ドロップポイントでアイゼンからスキー板に履き替えていざ滑降。傾斜は２０度前後で程良いが北側斜面のため表面がクラストしていてガリガリだ。

２０ターンほど下ってから先行パーティーのシュプールに従って三沢岳に向かう尾根の西側をトラバースする。結構長い斜滑降を続けた後、緩い登りになるのでスキーからアイゼンに履き替えた。なおも長い歩きでのトラバースが続き、ようやく三沢岳への登りとなる。部分的にちょっとしたナイフリッジも現れた。

その先の山頂直下の急斜面で先行する数人パーティーが滑り降りて来た。ここもガリガリ斜面で雪を削りながらの滑降だ。

彼らを見送ってひと登りで三沢岳山頂に到着した(12:50)。何かで読んだがここは

「抜群の展望の地」だそうだ。なるほど西に御嶽山、その右に乗鞍岳と北アルプス。目の前には中央アルプスの峰々とその先に真っ白い屏風のような南アルプス。農鳥岳と塩見岳の間には富士山も見える。北・中央・南の日本アルプスが目の前で展開している。主稜線から離れているから得られる景色だろう。

山頂でしばし休憩した後、再びスキーに履き替えて滑走に入る(13:30)。狭い稜線を小回りでこなし、先ほど先行パーティーが滑っていた斜面に出た。見た目よりも快適にここを滑ったがその下の４０度はあろうかという短いが狭い急斜面では立ち止まってしまった。先行パーティーも何人かは横滑りで降りたようだ。私も躊躇なく横滑りで慎重に降りて行った。ここを過ぎると主稜線に向かって長いトラバース

に入り、斜滑降で進む。が、それもやがて緩い登りとなり、アイゼンに履き替える。さらに今度は緩い下りになるのでスキーに履き替えた。このルートをよく知った人は恐らく全てスキーを履いたまま通過しただろうと後になって分かった。最後の稜線への登り返しはシールを着けての登りとなった。慣れぬ長い斜滑降で既にふくらはぎは麻痺状態だ。特に往路で谷側になった左足がひどい。それをなだめながらようやく

15:40 に主稜線にたどり着いた。もう辺りには誰もおらず、千畳敷カールの人影もまばらだ。疲れた両足に気合いを入れてカールの底に向かって滑り出した。極楽平から千畳敷カール底までのここ斜面も上部は急だ。雪面も荒れているので慎重に下る。最終 17:00 のひとつ前、16:30 のロープウェイでしらび平に下った。バスに乗り換えて菅の台に 17:20 に着いた。この日は車中泊するつもりでいたが疲れた身体ではとても面倒になった。そこで朝看板で見た「駒ヶ根温泉ホテル」に飛び込みで行って見る。「素泊まりで良ければ 3800 円」とのこと。もちろん異存はない。部屋は観光バスの運転手用のもので狭かったが風呂は広いのでこの値段なら良しとしよう。夕食は近くの駒ヶ根ファームスで名物ソースカツ丼 1100 円也にした。旨くて量が多かった。

翌２９日も天気が良かった。車をホテル駐車場に泊めてバスセンターまで歩く。再びバスとロープウェイを乗り継いで 8:10 に千畳敷カールに着いた。計画では今日は木曽駒ヶ岳から黒川に滑り込んでそのまま黒川を菅の台まで下る予定だった。しかし千畳敷カールに常駐する山岳指導員が「それができるのは３月までで今は無理。絶対にやめなさい」とアドバイスする。昨日の疲労困憊を考えると「仰せの通りにします」と言う他なかった。ということで２日目は木曽駒ヶ岳往復と伊那前岳西斜面滑降に変更した。

他の登山者と前後して八丁坂を登って行く。約１時間の登りで乗越浄土に到着(9:40)。ここには２軒の小屋があるが宝剣山荘の方が今年も営業していた。小屋は屋根が雪の上に出ているがその下は全部雪の中だ。したがって小屋の中は

昼間でも明かりがないと何も見えない。数年前の同じ時期にこの小屋に泊まったが雪の下で静かだったし羽布団だったので熟睡できた記憶がある。

スキーをこの小屋にデポして木曽駒ヶ岳に向かう。中岳を経て 10:45 に木曽駒ヶ岳山頂に到着。ここには伊那側と木曽側の二つの祠があるがどちらも屋根だけが雪から出ている。霞が掛かっていて御嶽も乗鞍も南アルプスも昨日のようにはっきり見えない。

往路を宝剣山荘まで引き返し、宝剣岳に登っている登山者を見物する。ここにも山岳指導員がいて「宝剣岳に登るにはザイルがない危険」と言う。

宝剣岳は北側斜面に夏道があって鎖が張ってあるがこの時期はそこに雪がべっとり着いている。したがって左のリッジ通しに登るのが最も安全に見える。それとてザイルがないと万一の場合に助からない。また夏道通しに登るとなると急斜面のトラバースになりこちらもザイルがないと恐ろしい。この日は３つのトレースが付いていた。

いつまで見ていても切りがないのでそろそろ伊那前岳に向かう。２０分ほどで尾根上の最高点に着いたので「ここが山頂か」と思ったが実はそこは2911mピークであり、伊那前岳山頂(2883m)はもっと先だった。何人かがそっちに向かっているのが見える。が、「下った先に山頂があるのも釈然としないなあ」などと勝手な理屈を付けてここで引き返すことにする。

千畳敷カールへのドロップポイントに戻って滑る支度をしていたら二人組の山スキーヤーがやってきた。彼らも千畳敷に向かって滑るつもりだったがその内のひとりが千畳敷とは反対側の東側の急斜面を見て「先にここを滑る」と言う。もうひとりの相棒が「こいつ困った奴ですよ。去年のＧＷは奥穂の直登ルンゼを滑ったんですよ」と言う。「おー！あの喉のように狭い超急斜面を！」と驚く私。「僕は上田の生まれで４才からスキーをやっているんですよ。でもずっとゲレ

ンデばかりで、バックカントリーを始めたのはここ数年です」とのこと。数年だろうと何だろうと直登ルンゼを滑ろうという技量と度胸に敬服した。

３０代半ばだろうか、実に滑ることが楽しそうだ「ィヤッホー！」と雄叫びを発して急斜面に飛び込んで行った。急斜面フリークとでも呼んだら良いのだろうか？彼らは我々古いタイプの山スキーヤーとは異なる人種だ。彼らは山スキーなどと古い言い方はしない。ＢＣ（バックカントリー）スキーと言う。沢屋や岩屋がピークに拘らないのと同じで彼らもピークには拘らない。斜面にのみ興味がある。それはそれで山の楽しみ方のひとつではないかと思う。ピークにしか興味のない百名山ハンターよりも山の良さを理解しているように思えるがいかがか？

それはさておき、反対側に滑って行った彼らを見送って私は千畳敷カールの底に向かって滑り出した。傾斜がきついのは最初だけか？と安易に考えていたがそうではなかった３０度超の斜面がかなり下まで続いていた。ブッシュも部分的に出ているのでそれを避けながらコース取りをし、カールの底まで滑り降りた(13:00)。

今回の山行はこれでほぼ終了。このまま下山してしまうのは余りに惜しいのでザックの上に座り込み、しばし周囲の景色を楽しみ、14:30 のロープウェイで下った。

昨晩泊まった駒ヶ根温泉ホテルで 500 円也の日帰り入浴の後、16:00 に駒ヶ根ＩＣに入り、途中夕食を挟んで 20:00 に伊豆の国の自宅に着いた。

今回は２日共良い天気で充実した山行だった。前回３月の乗鞍と今回の千畳敷周辺での山スキーでかなりの自信が付いた。３５度程度までの急斜面ならよほどの悪雪でなければ何とかターンできると思えるようになったし、それ以上の傾斜なら遠慮なく横滑りで降りればいいだけのことだ、見栄を張る必要はない、と達観できるようにもなった。

しかしひとりでの山スキーは何かあったらのことを考えると思い切った行動ができない。それに何より楽しさが半分しかない。また二人以上ならば互いに写真やビデオを撮りあえる利点もある。やはりできるだけ複数で行くことにしたいと感じた山行だった。

なお千畳敷カール周辺のＢＣエリアはどれも急斜面だが１本ずつが短めだ。そして常に登り返しが伴う。したがって宝剣山荘をベースにしてあちこち滑って回るのが楽しくて充実した計画となるだろう。

以上